

煙草取締法

市川 雄祐

人物

- ・新島太(16→50) 高校生→印刷会社の派遣社員
- ・新島久子(45) 太の母
- ・浅川航輔(33) 新島の働く会社の正社員。新島の上司。
- ・有吉豊子(48) 新島の同僚。派遣社員。
- ・相馬和恵(44) 新島の同僚。派遣社員。
- ・佐藤敦子(53) 新島の同僚。派遣社員。
- ・猫人A(67) 非合法喫煙サークルのメンバー。
- ・猫人B(55) 非合法喫煙サークルのメンバー。
- ・猫人C(45) 非合法喫煙サークルのメンバー。
- ・猫人D(75) 非合法喫煙サークルのメンバー。
- ・猫人E(52) 非合法喫煙サークルのメンバー。
- ・猫人F(62) 非合法喫煙サークルのメンバー。

○学校の屋上

昼下がりの学校の屋上にて、学ラン姿の新島太(二〇)がただ一人立っている。

新島、煙草の箱から煙草を一本取り、口に持っていく。ライターで火をつけ、煙を斜め上に出す。

雲ひとつない青空である。

新島、もう一度煙草を吸う。

そして、屋上の際の柵まで歩いていき、下方にある校庭のグラウンドを見やる。

生徒たちがジャージを着て、組体操の練習中だ。4つのピラミッドが只今完成しようとしている。

新島、くるっと身を翻し柵にもたれかかり、笑顔で煙草を吸う。

そして、煙草を地面に叩きつけ、足で火を消す。

それを拾い、屋上の校舎に入る扉まで小走りで向かい、勢いよく扉の上に投げる。

そして、校舎の中に入る。

○旧・新島家のダイニングキッチン

NDKの家である。新島久子（45）が皿洗いをしている。新島は扉を開けて中に入る。

新島「ただいま」

新島、早足で歩く。

久子「また煙草吸ったの！匂いすごいわ」

新島、足を止める。

新島「うるさいな、いいじゃないか。うちは元々煙草農家だろ！」

久子「それはお父さんが亡くなるまでじゃない。それにあなたは未成年だわ」

新島「そんな法律、誰が守ってるんだよ」

久子「太、口答える前にまずお父さんに挨拶しなさい」

新島、ダイニングの隣の和室にある仏壇まで歩く。

○和室

新島、仏壇の前に座り、合掌する。

仏壇に、煙草農場にいる父の写真(45歳時)が供えられている。

その隣に供えられているのは、菊の花。

○新島の家(朝)

父の写真の隣に、久子の写真(45歳時)がある。

合掌しているのは、白髪混じりの新島太(50)である。スーツを着ている。

場所は、1ルームの部屋だ。所狭しとベッド・テレビ・ちゃぶ台が置かれている。

女性アナの声「おはようございます。朝のニュースをお伝えします。」

テレビでは、女性アナウンサー(28)が朝のニュースを読んでいる。

女性アナ「本日から煙草取締法が施行となります。昨年成立したこの法律によっ

て、煙草の使用・所持・製造・譲渡が発覚した場合、一年以上の懲役、又は500

万円以下の罰金が科されま

新島、リモコンの電源ボタンを乱暴に押し、テレビの電源を切る。

そして、リモコンをソファに勢いよく投げる。

○通勤電車(朝)

新島、電車の座席に座っているが、貧乏ゆすりで膝が揺れている。

新島の目の前に立つ、髪をジェルをたっぷりつけて固めたサラリーマン

(28) が、眉間にシワを寄せている、

女子高生△の声「え、待って、この大麻クッキーのお店めっちゃよくない？」

新島の左斜め前方にある電車の扉に、二人の女子高生(29)が寄りかかっている。女子高生田のスマートフォン画面を二人で見ている。

女子高生B「二ヶ月前に出来たばっかだって！竹下通りなのに何で気づかなかったんだろ！」

女子高生△「え、それにめっちゃカラフルでかわいー絶対映えんじゃん！」

女子高生田「ね、この後チルしに行かん？」

女子高生A「行こ行こ！マジ大麻最高！」

新島、表情を変えずに貧乏ゆすり―先程よりは小ぶりに―を続けている。

○印刷会社のオフィス

一つのフロアにて、50人以上が同時に仕事をしている。

新島のデスクがある島には他に⑤の人間僚がいるが、全員中年女性である。新島は、島の右端にあるデスクにて仕事をしている。

新島、パソコンのキーボードを勢いよく叩きながら、貧乏ゆすりをしている。

その振動で、新島の正面にある卓上カレンダーが倒れる。

新島の正面に座る有吉豊子(48)、正面左に座る相馬和恵(44)が目を合わせ、眉間にシワを寄せて首を横に振る。

新島、下を向いたままキーボードを打っている。

浅川の声「新島さん！ちょっといいですか」

新島、顔を上にあげる。

浅川航輔(33)が、新島のデスクから5メートルほど離れた所に立っている。

浅川「忙しい所すみませんが、ちょっと」

新島「はい、今行きます」

新島、席から立つ。

○印刷会社の会議室

→畳ほどの会議室に、机と椅子二つのみがある。

浅川が入り口の扉を開け、新島を中に促す。

浅川「こちらに座っていただいて」

と、上座に促す。

新島、上座と下座をキョロキョロ見二、三度見た後、頭を下げて上座に座る。

浅川、素早く下座に座り、手を組んで机の上に置く。

浅川「すみません、先日お頼みした印刷物の品質管理についてなんですけど、相談したいことがありました」

新島「はい」

浅川「新島さん、もう少し周りの方とコミュニケーションをとって仕事をしていただきたいです」

新島「はあ」

浅川「同じ島に印刷プレスを担当する方もいますし、原稿チェックが得意な方もいます。自分の仕事が終わったからといってそのまま放置せずにね、周りの派遣

の方と共有していただきたいんです。」

新島「申し訳ございません」

浅川「新島さんも、派遣契約を途中でなんてこと、嫌でしょう。ですから、普段から周りの方とね、円滑なコミュニケーションを取っていただけるととても助かるんです」

新島「すみません、頑張ります」

全く動かない、新島の膝。

○印刷会社のオフィス

新島、自分のデスクに戻ってきて、椅子に座る。

そして、自分の周りを見渡す。女性ばかりである。

その中で、自分の左隣に座る女性、佐藤敦子（53）と目が合う。

敦子「新島さん、どうかしました？」

新島「あの…」

大きい音のチャイムが鳴る。

浅川「皆さん、ちょっとだけ注目して下さい！」

浅川、フロアの真ん中にある台の上に立っている。

浅川「本日から、正式に煙草休憩がなくなったということで、代わりにお菓子休憩というものがありました！これからの30分間は、休憩時間となります！」

フロアの所々から、「おお」という声が聞こえる。

浅川「そこで、普段頑張っている皆さんには、今日だけ特別に！お菓子のプレゼ

ントがあります！束の間のお菓子パーティーをしましょう！」

新島の島にいる女性達、笑顔で拍手している。

× × ×

新島のデスクの上にある、未開封のチョコタルト。

新島の島の他の女性達は、二人一組となってタルトを片手に椅子を寄せ

合い、ボディタッチしながら談笑している。

豊子「じゃああなたの旦那も浮気してるわよ！」

和恵「やっぱりそうよね！今日問い詰めなきゃ」

豊子「遠慮はいらないわよ、土下座させてやらなきゃ」

新島、二人の会話の途中で、音を立てないように椅子から立ち、出口に向

かう。誰も気付く人はいない。

○印刷会社の廊下

廊下には新島を除いて誰もいない。ワイワイ騒ぐ声だけ響いている。

新島、小走りしている。

○印刷会社の喫煙室

新島、喫煙室の前まで来ると、「ハアハア」と息を切らして前かがみになる。

体勢を直しながら、喫煙室の扉を勢いよく開ける。

喫煙室の中は、段ボールだらけである。足の踏み場がほとんどない。

新島、トボトボと喫煙室の中に入り、そっと扉を閉め、扉に寄りかかる。

そして、無言のまま佇む。

新島、突如として、スーツの内ポケットから煙草の箱を取り出す。

そして箱を開け、中に入っていた煙草一本とライターを勢いよく取り出す。

新島、ライターで火を灯し、煙草に火をつけようとするが、火がつく寸前

をやめる。

煙草一本とライターを丁寧にしまい、内ポケットに戻す。

そして、ズボンのポケットからスマートフォンを勢いよく出し、乱暴に操作する。

新島の声「社会が女に甘くするから、こうやってのさばるんだ！下等生物のゴミ

がしゃしゃり出んな！」

新島が右手の人差し指で画面をタッチすると、「ピコン」という投稿の音が聞こえる。

新島、鼻息荒くしながら、貧乏ゆすりをする。

○通勤電車(夕方)

新島、電車の座席に座っているが、貧乏ゆすりで膝が揺れている。

手に持つストロー付きの野菜ジュースを口に持っていき飲むが、ストローを噛んでいる。

新島の正面の座席に、本と鉛筆を持ち勉強している青年(22)がいる。

彼は本に向かって目を細めると、鉛筆を口に持ってきて煙草を吸うよう

にして嘯む。

そして、鉛筆を口元から離すと溜息をつく。

新島、膝の揺れが大きくなる。そして、野菜ジュースの胴体を手で潰した

後、席を立つ。

青年、鉛筆を落とす。

新島、他の場所に移動しようとしていたが、鉛筆を取ろうと前かがみにな

った青年と勢いよくぶつかる。

新島、斜め後ろに転ぶ。

床に転がる、新島の煙草の箱。

啞然とする、青年。

新島、体を起こす。

啞然とする、電車内の乗客達（20台の男性一人、50台の女性二人）。

顔を横に振りながら慌てる、新島。

新島、立ち上がり、電車の前方車両に向かって走り出す。

しかし、車両と車両の間の扉を開けるのに手間取る。

○通勤電車の一番前の車両（夕方）

その場に誰も乗客はいない。新島の後を追いかけて来る乗客もいない。

新島、電車の一番前まで到着するが、足は落ち着かず、その場所を歩き回る。

そして、扉と座席の間のスペースに体を埋め、貧乏ゆすり膝を揺らす。

電車、ホームに着き、扉が開く。

新島、走りながらホームに出て、同じホームの反対側に停車している電車に乗る。

○無人電車（夕方）

無人電車である。

新島、座席に座るが、「ハアハア」と息が切れている。

そして、目を閉じ、首を垂らして眠ってしまう。

○神社の参道（夜）

無人の神社である。参道の両脇にライターが等間隔に置かれている。

白猫が一匹、その参道を横切る。

○無人電車(夜)

新島、目を開け、左右を確認しに首を振る。

無人の車内である。そして、電車はホームに停車している。

新島、席を立ち扉まで歩いて行き、(押しボタン式扉の) ボタンを押し、扉から出る。

○素朴な駅のホーム(夜)

無人のホームである。電子式の発車標・改札は存在せず、駅内は全て古びた物で構成されている。

電車は、新島が降りると扉が自動的に閉まり、発車する。

新島、上を見上げる。

「猫草山入口」と書かれた、駅標。

新島、腕時計を確認する。

ガラスが割れ、時間が止まってしまった腕時計。

新島、ホームの時刻表が書かれている壁面まで歩く。

そして、時刻表で書かれている時間を指で指して確認するが、18時以降に来る電車は存在しない。

眉間に皺を寄せる、新島。

そして、ゆっくりと駅の改札を出る。

○猫草山入口（夜）

駅からすぐ出たところにある、山の入り口である。しかし、電灯も含め何も存在しない殺風景な場所であり、入り口までの道も歩幅が狭い。

新島、スマートフォンのライトをつける。

そして、前方を照らす。

「猫草山入口」と書かれた大きな看板と、その隣にある山道の始まりの階段がある。

新島、階段を上る。最初の4・5段はゆっくり登っていたが、その先は走って一気に終わりまで上る。

新島、階段の先にある広間に着くと、大の字になって寝る。

満天の星。

新島、しばらく大の字のままにいる。

その後、上体を少し起こす。

山道の遠くの方で、無数の赤い点がチカチカしている。

新島、上半身を勢いよく起こし、立つ。

赤い点のチカチカは数が増える。

新島、スマホのライトを片手に、山道の木の階段をゆっくりと上がっていく。

○神社（夜）

山の頂上にある、こじんまりとした神社である。3メートルほどの拝殿のみがある。

新島、山の頂上に着く階段を登りきる寸前で、少し後退し身を潜める。そ

して、スマホのライトを前方に出す。

拝殿の後ろに無数の赤い点があり、「ジュボツ」という音が同時に聞こえる。

新島、階段を音立てずにゆっくり登りきる。

そして、拝殿の近くにある木まで歩いていき、そこに身を潜める。

そして、木から片目だけ出す。

顔の上半身に白猫の仮面をつけた六人の人間達が、円になりながら煙草を吸っている。

彼らは、左手で煙草を吸い、右手にはライターを持っている。彼らの円の

真ん中には、灰皿スタンドの代わりに小さい賽銭箱が置かれている。

彼らのうち一人が、その賽銭箱に「トントン」と煙草の灰を落とす。

限界までガン開いている、新島の片目。

新島の手から滑り落ちる、スマートフォン。

「パキン」という音が聞こえ、画面のガラスが割れる。

猫人Vの声「みんな！火を消せ！」

暗闇になる。

10秒ほど「ガサガサ」という音が聞こえるが、その後無音となり、30秒程その状態が続く。

「ジュボ」という音と共に、火のつくライター。

新島は、6つのライターを持った右腕が突きつけられ、円状に囲まれている（腕以外の体は何も見えない）。

猫人A「お前は何者だ！」

と、猫人A(67)が体を見せる。

猫人B「どうしてここにやってきた！」

と、猫人B(55)が体を見せる。

猫人C「警察のスパイだろ！」

と、猫人C(45)が体を見せる。

新島「違う！普通の人間だ！」

猫人D「そんな訳ない！」

と、猫人D(75)が体を見せる。

猫人E「普通の人間がなんで真夜中にこんな山奥に来るんだ！」

と、猫人E(52)が体を見せる。

猫人F「今日から煙草が犯罪になるから、張っていただろ！」

と、猫人F(62)が体を見せる。

新島「そんなことはない！むしろ…お前達の味方だ！」

猫人A「どういうことだ！」

新島「煙草を持ってることがバレて、逃げてきたんだ…訳分からずに気づいたら、ここにいたんだ…」

猫人B「それなら証拠を見せろ！煙草の一本でも持ってるだろ！」

新島、スーツの内ポケットを入念に確認する。

× × ×

フラッシュバック

通勤電車

床に転がる、新島の煙草の箱。

啞然とする、電車内の乗客達(青年、20台の男性一人、10台の女性二人)。

× × ×

顔を横に振りながら慌てる新島。

そして、倒れこむように膝をついてその場に座る。

そして、「ああ」とむせび泣きながら、勢いよく貧乏ゆすり膝を揺らす。

膝の揺れの反動で、ズボンのポケットから、携帯灰皿が落ちる。

新島、下を見る。

地面に落ちたままの、携帯灰皿。

新島、「ハァハァ」と言いながら携帯灰皿を拾い、立ち上がる。

そして、携帯灰皿の中からシケモクを一本取り出し、猫人♫に見せる。

猫人♫「お前、ダメじゃないか、まだ吸えるぞ」

と言い、ライターの火で新島のシケモクに火をつける。

新島、大きく息を吸って煙草を吸い、煙を吐く。

猫人、6人一齐に仮面を外す。皆中年以上の男性であった。

猫人♫「ここは、煙草を愛する男達の避難所だ。職場でも吸えない、家庭でも吸えない、街にも喫煙所は無くなった、法律でも禁止された！…だから世を忍び、

仮面を着けて吸うんだ。」

猫人♫「こんなところまで、本当は来たくない…年取った体にはしんどすぎる。

でも、ここしかないんだ」

猫人の「それに、もう貯めてある煙草の数も多くない、もうどこにも売ってないからな…あと一ヶ月もしたら、高い危険を冒して闇から仕入れるしなくなる…そうになりたいはずれ捕まるだろう…」

新島「そのことなら問題ない」

猫人6人、新島の方を見つめる。

新島「俺の家は元々煙草農家だ。製造方法なら知っている。これからこっそり自宅で栽培しようとしていたが、あんたらに分けてあげることまでできる」

猫人A「いいのか、他人に分けると、捕まる危険性が増すぞ！」

新島「いいんだ、ただし…あんたらの仲間に入れてくれ」

猫人B「ああ、勿論だ」

と、白猫の仮面を新島に渡す。

新島、仮面を着ける。それと同時に、六人の猫人も仮面を着ける。

× × ×

スタンドに置かれた、小さな賽銭箱。

その周りに、7人の猫人が立っている。彼らは、賽銭箱に向かって両手を突き出している。左手には煙草、右手にはライターを持っている。

七人、同じタイミングで左手の煙草を口に持っていき、右手のライターで火をつける。そして、煙草を吸う。

スタンドに置かれた、小さな賽銭箱。七つの煙草を持つ手があるの上に置かれる。そして、灰が同じタイミングで落とされる。

○印刷会社のオフィス

新島、隣のデスクの敦子と向き合って話をしている。

新島のデスクの正面には豊子、正面左には和恵が座っている。

新島「お、ということはお子さん大学合格したんですね！おめでどうございませう」

敦子「ありがとうございます…新島さんに色々励ましてもらったから、私もなんとかやっつけていました」

豊子・和恵は椅子をくつつけて、ラスクを食べながら小声で話している。

豊子「最近、新島さんやけに明るいわね」

和恵「そうだわね、何かいい事あったのかしら。まあ、前よりは全然いいけど」

豊子「それに、香水臭くない？」

和恵「ここに来て、モテようとしてるのかしら!？」

豊子・和恵、新島に聞こえるように大声で笑う。

新島、表情を変えずに敦子と話し続ける。

そして全く動かない、新島の膝。

○新島の家(夕方)

部屋を覆い尽くすように、煙草の葉っぱが栽培されている。

新島、数少ないスペースに置かれたちゃぶ台の下に座っている。ちゃぶ台

の上には、紙巻きたばこの巻器・巻紙・粉状の葉煙草が置かれている。

新島、慣れた手つきで紙巻きたばこをセットする。

そして、ライターで火をつけ煙草を吸う。

新島、煙を吐いた後、満面の笑みになる。

そして、ライターを幾度も「ジュボツ」と火をつけ、手遊びをする。

○夕日

夕日が地平線に沈まんとしている。

○新島の家のアパートの玄関(夕方)

新島の家のアパートのエレベーターから、警察官が三人出てくる。

彼らは、「ザッザッ」という足音を立てながら、新島の家の子向かい歩

く。

○夕日

夕日が地平線に沈み、完全に隠れる。

○新島の家(夕方)

新島に手遊びされているライター、突如として何度指で押されても火がつかなくなる。

(終わり)